
『天空の難破船（ロストシップ）』 番外編

真知歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロストシップ
『天空の難破船』番外編

【Nコード】

N7300X

【作者名】

真知歌

【あらすじ】

名探偵コナン人気劇場版『天空の難破船』ロストシップの番外編。

海に落としたはずのあの男がまさか生き延びあの場から逃亡していたなんて…

男はコナンを恨み今も“復讐”の道へと事を進める…

キッドが蘭にした“あんなこと”

それを聞いたコナンはさすがにこればかりは見逃すことはできずキ

ツドを捜しに突如走り出す!!

コナンに迫る二度目の危機…

果たして男を捕まえる事はできるのか!?

蘭と灰原からなる三角関係もお見逃しなく!!!

“黒羽快斗”遂に怪盗キッドの正体を明かしたコナン…
コナンとキッドの行方は!!!?

あの日の真相（前書き）

深夜3…00

「米花町」

暗闇に街灯が灯る中

一人の男が不適な笑みを浮かべて歩く

あの日の真相

あの後、悪人達は捕まり刑務所に入った

だが、海に落ちたあの男だけは違った：

生き延び、海から上がると自分に迫り来るパトカーの群れ

男は間一髪でそのパトカーの群れから脱出し逃亡していたのだ：

そしてその男の脳裏には今も“復讐”という文字が張り巡らされていた

あれから三日後：

・毛利探偵事務所・

蘭は携帯を握りしめて何かを考えていた
その様子に気付いたコナンが問い掛ける
コナン「蘭姉ちゃん？どうしたの？」

蘭（！）

「ううん、なんでもないの」

だが携帯を見つめて切ない顔をしていた

蘭（いっそのことキッドが新一ならよかった…）

（犯罪に手を染めるのは良くないけど、どこでなにしているかわからないよりはましなもの…）

（キッドの温もり、新一みたいだった…）

危うくキッドと口付けを交わしてしまいそうになったあの時を思い出しそう思っていた

コナン「…また新一兄ちゃんのこと？」

言いくそうに蘭に聞く

蘭「…」

すると蘭は無言でコナンに笑いかけた

蘭「私ね、キッドは新一だと思ってたの」

コナン「えっ？」

蘭「でも違った、だって新一はあんなことしないもの！」

あんなこととはキッドが蘭のお尻を触ったことだ

するとコナンは忘れていた蘭の言う『あんなこと』を思い出し顔色を変え蘭に迫る

コナン「あ、あんなことってなーに!？」

蘭は照れながら小学一年生のコナンに何の疑いもなくあの出来事を耳元へ近寄り話した

潜む赤の影

それを聞いたコナンⅡ新一は

コナン「えええっ!?!?それ本当!?!?」

驚き事務所に響き渡るくらいの大声で言った

蘭「しいゝ!!!!」

「お父さん朝帰りでさっき寝たばかりだからもう少し寝かしといてあげて」

「大きい声すると起きちゃうでしょ?」

口元に人差し指を立ててそう言う

だがコナンの耳には入っていない

コナン「……………」

蘭「コナン君?どうかした?」

コナン「……………」

固まり啞然とするコナンを蘭は不思議そうに見る

蘭「全くねゝ新一ったらどこで何やってるんだかつ!」

「あっ!そうだこのこと新一に話したら飛んできてくれるかな?どう思うコナン君?」

笑いながら蘭は言う

だがコナンは別の事を考え何かを決めたかのように言った

コナン「あっ僕ちよつと博士んち行ってくるね!」

蘭「ん?気を付けてね!」

疑問ながらも見送った

コナンは探偵事務所を出て阿笠邸へと走る

コナン（冗談じゃねーよ、飛んでくるどころか失神しちまいそうになったじゃねーか!）

（ちくしょうっ、キッドのやつ…今に見てろよ）

その時探偵事務所の下では奇妙な男が彷徨いていた
男はコナンが事務所から出ていくのを確認し、事務所へと階段を昇る
その男の姿はコナンの視界にも当然入ったがそれどころではないコ
ナンは特に気になることもなかった

嫉妬と無謀な挑戦

「阿笠邸」

昨夜遅くまでテレビを見ており起きたばかりの博士と灰原はコーヒ
ーを飲みながらのんびりしていた

その時、勢いよくドアが開いた
バンッ！！

コナン「博士！頼みがある！！」

ドアが開くと同時にコナンが息を切らしながらそう叫んだ

まさかと思う灰原はコーヒーを置いてコナンに近寄る

灰原「まさか、組織のこと？」

博士もそのコナンの表情に驚き問い掛けた

博士「なにか情報でも掴んだのか？」

コナン「いいや、ちげえ…」

「キッド：怪盗キッドの事を調べてほしい」

ほっとしたようながっかりとしたような顔をする博士と灰原
博士「彼となんかあったのかね？」

するとコナンは黙り込む

灰原「工藤くん？」

コナン「……」

「別になんでもねえよ…」

恥ずかしそうにそう言う

だがコナンに好意を寄せている灰原にとっては禁句の一言だ
灰原「なら帰りなさい」

灰原は完璧に拗ねている様だ

コナン「はあ？」

灰原「頼み事をするならまず、頼む相手に事情を説明するのが筋よ」
「そして博士と共にいる私は自然と博士の行う事に協力してしまう、
助手としてしっかり説明するのね」

灰原の正しすぎる意見に何も言えなくなるコナン

するとコナンはあの時キッドが蘭にしたことを説明すると共に丁度
いい機会だからと言い怪盗キッドの正体や所在地に関する事を調べ
てほしいと二人に頼んだ

奇術師への搜索願ひ

当然の如く二人の目は点になっていた

コナン「あんだよ…？」

顔を赤くし拗ねながら二人を睨む

博士「キッドの正体を暴きたいというのは分かるんじやが…」

灰原「その理由が、ねえ…」

コナン「俺はあくまでもいい機会と思ったただけだぜ？別にキッドと喧嘩しに行く訳じゃねえからな？」

素直にキッドを叱りたいと言えないコナン

灰原「まあ、いいけど」

博士「しかし：調べるといつてもネットなんかに出ている記事は警察の情報を元に作成してあるんじゃないし、その警察自体ですら怪盗キッドの事はあまり明らかになってはいないんじゃない？」

灰原「そうね、発明家と科学者が調べられるような件ではないわね…」

コナンは下を向きキッドを調べる方法を考える

コナン（確かにそうだな…）

（神出鬼没の月下の奇術師が容易く正体を明らかにさせるような真似はしない…）

灰原「最低でも彼を追っている探偵みたいな人物が必要ね」

コナン（！！） 博士（！！）

灰原の一言でコナンと博士は同時に気が付いた

博士「そうじゃ！君の家に行けば…」

コナン「ああ、キッドに関した資料が山ほどありそうだぜ…」

コナンは工藤邸へと駆け出した
その後を灰原と博士もついて行く

荒んだ心の憎しみ

その頃

毛利探偵事務所の扉の前ではあの男が立っていた
コンコンッ

不適な笑みを浮かべながらノックする

蘭「はい」

小五郎「んにゃ？」

その音と声で眠りから覚めた小五郎はドアの方を向く

蘭がノブに手をかけてドアを開けた

蘭「どちら様でしょうか？依頼ですか？」

男はうつむいて事務所内へと入る

不自然に思う蘭と小五郎

小五郎「なんの用だあ？」

すると男は腰に手をかけた

カチャッ…

蘭（！！）

それを見抜いた蘭はとっさに構える…が
時すでに遅し

男「覚えているか？」

「俺は覚えてるぜ？君の特技が空手だってね？」

そう言いながら男は蘭の頭に銃口を向ける

小五郎「蘭っ！！！」

その男の顔を見た小五郎は

小五郎「お前！！まさか、こないだの…」

と言いながら男に近寄る…だが

カチャツ…

男「そう、俺は三日前に飛行船内を騒がせた真犯人…」

「もう少しで作戦が成功し人生に花を咲かせる事ができた…」

「なのにここに住んでるガキのせいでその夢も儚く散った、どうせ牢屋行きが確定している俺はどうしてもあのガキが憎くて、俺と同じ気持ちを感じてくたしてここへ来たんだ」
「そう言いながら小五郎にも銃を向けた」

小五郎「くそっ…」

白重の塔

工藤邸へと入った三人は優作の書斎へと向かった

灰原「彼、いなさそうね？」

コナン「出掛けてるみてえだな？」

コナンは書斎へ入るとキッドに関する情報の資料を探し始めた

灰原と博士も協力し探す

数十分後、怪盗キッドの資料がまとめてあるファイルを発見した

コナン「あった！これだ！」

そこには八年前のキッドの様子が記載されていた

そしてそのファイルには一枚の写真が挟まっていた

灰原「写真…？」

そこには有希子とシャロンと盗一と快斗が写っていた

博士「有希子ちゃんと…」

コナン「シャロン… ベルモット」

灰原（！！）

博士「なぜこんなところに！？」

コナン「シャロンは母さんと友達だからな…」

灰原……

博士「しかし、ここに写っている坊やは小さい頃の新一にそっくり
じゃなあ」

灰原「つまり今って事ね」

コナン（！？）

その写真を見てコナンは閃いた

コナン「まさかこの子供がキッドなんじゃ…」
コナンは前に蘭が道で自分そっくりの人物を見かけたと電話で聞いた事があった

怪盗キッドの資料に紛れ込む写真

その写真に写っているのは有希子がマジックの修行に出掛けた時と思われる様子、そして八年前に消えた怪盗キッドが再びまた最近活動を再開したという事実から盗一が初代キッドで快斗が二代目キッドだということが容易に推理できた

そしてそれを灰原と博士にも伝えた

暴かれる純白の時

博士「じゃ、じゃあ優作くん達は知っているという事かね？」

コナン「ああ、キッドの正体がこの人達と知っているかどうかは分からねえが、少なくとも所在地くらいは分かると思うぜ？」

博士「じゃあ電話で…」

コナン「いや、無理だな」

灰原「どうして？」

コナン「度々テレビや新聞でキッドとの対決を取られて世間にさえ晒されているのにも関わらず父さんや母さんには今までキッドに関する事は一切聞かされていない…」

「当然俺がキッドを狙っているというの是一目瞭然で分かるはずなのに何も教えないということは教えたくないか教えられないか…」

灰原「つまり所在地を知っていたとしても教えてもらえないということね？」

コナン「ああ」

博士「それじゃあ一体…」

コナン「もう一つ、手がかりはあるぜ？」

自信満々な笑みを浮かべてそう言う

コナンは博士と灰原の前に自分そっくりの人物を見た蘭の話を話した

そしてその人物が制服を着て歩いていたという事と蘭がその人物を見かけた場所、そして唯一の手掛かり…

それは写真の背景の一部にある水族館

そう、その水族館の所在地は江古田市だった

素直な意地っ張り？

コナン「かといって江古田市に住んでいるかどうかは分からねえ…」
「けど確か、母さんは修行するのはいつもそのマジシャンの自宅だと言っていたしこの写真に写っている母さんはバッグもなにも持っていない…」

「それに背景にあるこの水族館以外は全て住宅だ…」
「こんな住宅地で写真を取るなんて、特にどこに行った訳でもなくただ記念に…と撮った写真の可能性が高い」

灰原「そうね、下手したらこの向かい側に家がありそうね？」

コナン「ああ、江古田市に自宅があるならあの歩道を渡っていたということも理由がつく…」

灰原「彼が高校に行っているならその付近の高校を調べればもしかしたら…」

コナン「ああ、江古田市にある高校は三つ…」

「この時間ならまだ校内に生徒がいるだろう！」

そう言うのと立ち上がり出口へ向かうコナン

灰原「待って！！」

呼び止めた

コナン「(!?)」

不思議に思い振り返る

灰原「私も行くわ？」

コナン「えっ？」

博士「哀くん？」

灰原「あなた似の彼を一度間近でみてみたいわ」

コナン「キッドをか？俺は別に構わねえけど？」

そう言われ灰原はニコリと笑う

灰原「まあ、発車時刻を過ぎた電車は既に扉が閉まり加速し反対側の電車に乗り換える事はできない…」

コナン（…？）

灰原（そう、同じような人物が現れたとしても私の心は…　そう、工藤くん…）

（私は既に特急電車に乗ってしまっているわ）

白き盗賊を捜して三千里

コナン「おめえいきなり何言ってるんだ？」

「当たり前だろ？ 乗り換えたい場合は次の駅まで待つんだな？」

灰原

全然意味が分かっていなく現実的に考え正論を述べたコナンにイラツとした

だが灰原は歩いて行くコナンについて行った

スケボーに二人で乗り一つ目の高校に向かう

灰原「あそこに教員がいるわ」

灰原が指差す方には校庭で掃除をしている男性教員がいた

コナン「ちょっと待ってろ」

そう言うときスケボーから降りたコナンは男性教員らしき人物に何やら話しかけに行った

だが数秒後校門で待つ灰原の元に帰ってきた

灰原「不発のようね？」

コナン「ああ、次行くぞ」

また二人はスケボーに乗り二つ目の高校へと向かった

二つ目の高校に着くと休み時間で校庭には何人かの生徒達がいた

コナンと灰原はその一人の生徒に歩み寄り訪ねた

コナン「ねえねえ、このお兄さん知らない？」

そう言うときコナンは小さい頃の快斗の写真を見せた

コナン「それかなり前の写真で今は高校生くらいだと思っただけど…」

男子生徒A「んゝわからないな」

男子生徒B「なんだ？どうしたんだ？」

もう一人の生徒が寄ってきた

灰原「今はこんなような顔をしてると思うわ」

そう言うと灰原は新一の写真を男子生徒達に見せた

奇術師の追求

コナン（へっ…？それ俺じゃねえか）

男子生徒A「これ、あの高校生探偵の…」

男子生徒B「工藤新一じゃねえの？」

コナン（ハハッ… そうなるわな…）

呆れているコナンの近くを女子生徒二人が通りかかり衝撃的な一言を言った

女子生徒A「ん？快斗？」

女子生徒B「あっ、工藤新一！」

男子生徒が持っている写真を覗き込みそう言う

コナン（！）

「今お姉さん何て言った！？」

「この人知ってるの！？」

女子生徒A「工藤新一…って人？」

コナン「違って、そのお姉さんが工藤新一って言う前…！」

女子生徒A「あゝ快斗？快斗に似てたから…」

「でも良く見ると少し違うわね」

コナン（快斗…？）

「その人ここにいる！？」

女子生徒A「ううん、快斗は隣の江古田高校に通ってるの」

灰原「その人の名字は？」

女子生徒A「黒羽よ、黒羽快斗！」

「ほらあの、有名な天才マジシャンだった黒羽盗一の息子なの！」

コナンは不適な笑みを浮かべる

コナンと灰原は確信しその生徒達にお礼を言うと颯爽と江古田高校へと向かった

現在時刻は12..50:

テストに近い江古田高校は昼には授業が終わり皆帰ろうと下駄箱で靴を履いていた

そこにコナンと灰原が到着した

到達した銀の伯爵

コナン「やべっ！帰られちまうっ！」

そう言うのと“黒羽快斗”を捜しに慌てて下駄箱へと向かうが

灰原「待って！！」

真剣な顔をする灰原がコナンを止めた

灰原「あなたは彼を知らないけど、彼はあなたを良く知っているわ」

「むやみに行けば用心深い彼ならきつと正体を隠そうと何かしら手を打ってくるわ」

「そうなると面倒よ？」

コナン「確かに、あのキッドが素直に正体を明かすとは思えねえしな…」

灰原「それに見て？」

と灰原が指差す方には誰かを中心にしその周りに何人かの者達が集まっている様子が見えた

その中心にいる者は皆にマジックを披露していた
そしてその顔は新一に似ており写真に写っている子供と同じ人相だった

コナン「あれは…！」

灰原「白き罪人のお出座しね？隠れるわよ？」

コナンと灰原は校門の影に隠れて快斗を監視した

すると快斗は一人で校門を出て自宅と思われる場所へ帰って行った

コナンと灰原はこっそり快斗の後をつけて来て今は快斗が入った家の前にいた

灰原「間違いないわね」

コナン「ああ」

家の表札には“黒羽”と書かれていた

灰原「どうする？」

コナン「そりゃもちろん…」

《ピンポーン♪》

コナンは黒羽邸のチャイムを押した

すると中から母親と思われる人物が出てきた
「はい？」

斬新な取り引き

その頃

毛利探偵事務所には引き続き異様な空気が流れていた

カチツカチツカチツカチツカチツ…

時計の秒針の音だけが響き渡っていた

警察に連絡することもできず、防御し攻撃することもできずに二人は男に銃を向けられたまま立ち竦んでいた

小五郎「いつまでこのままなんだ？」

沈黙を破った

男「あと10分…」

「あと10分したらここを出る」

小五郎「どこに行くつもりだ？」

男「あんたには関係ない」

そう言って蘭を見る

小五郎（！）

「まさかおめえ、蘭をつれて行く気じゃねえだろうな!？」

男「フフツ、そのまさかだ」

小五郎「バカ野郎! そうはさせるかっ!!」

小五郎は男に近づき銃を奪おうとする

だが男は銃を取られる前に小五郎へ向かって発砲した

バンッ!!

蘭「お父さん！！！！」

.....

弾は小五郎の腕に当たり小五郎はその場にしゃがみ込む

小五郎「くっそっ……」

蘭「お父さん！！」

「なんてことするのよ！！？」

蘭は激怒していた

男「恨むなら俺じゃなくてあのガキを恨め？」

「君も下手な真似や言うことを聞かなかったらこうなるよ？もちろんあのガキもね？」

蘭は唇を強く噛み締め握り拳をギュツと握り締めた：

階下の訪問

男「さあ来てもらおうか？急がないと銃声を聞き付けたやつらが来てしまうからね」

小五郎「……………」

動悸が早くなる小五郎

蘭は小五郎を見つめて何かを決意した様だった

蘭「一つ条件があります…」

男「なに？」

蘭「父に救急車を呼んであげてください！！」

この状況では何もできなくただ男の言うことを聞くしかなかった蘭はせめてもの頼みというか当然の頼みをした

男「わかったよ」

そう言うと蘭を外に連れ出し車に乗せ出発した

コナンは黒羽邸のチャイムを押し

快斗の母親が玄関に出てきた

千影「どちら様ですか？」

コナン「僕、快斗お兄ちゃんに用事があって訪ねてきたんだけど快斗お兄ちゃんいるかなあ？」

子供の口調でそう言う

千影「あら？快斗はこんなに可愛い坊や達とお友達なのね？」

コナン「エヘヘヘ」

灰原（：！）

千影「でも残念ね、快斗はまだ帰ってきてないのよ…」

コナン「…そっかあ！じゃあここで待っててもいいかなあ？」

千影「そうさせてあげたいんだけど、オバサンも出掛ける用事があるのよ…」

コナン「そうなんだ… 残念…」

「仕方ないね？また来るよ」

コナンは奥の僅かに開いている部屋のドアを見つめてそう言った

用心深いファントム

千影「ごめんなさいね…」

するとその部屋から声が聞こえた

「母さん、通しても構わねえぜ？」

灰原「…」

コナンは不適な笑みを浮かべる

千影「…どうぞ？」

千影はコナンと灰原を部屋へ案内した

コナンと灰原は案内された部屋へ入った

するとそこにはまだ制服を着てテレビを見ていた黒羽快斗がいた

快斗「よお、名探偵！」

コナン「さすがファントムレディーだな？」

「お前より用心深いぜ？」

快斗「何しに来たんだ？学校からつけてきたりなんかして？」

灰原「ぷっ…」

思わず笑ってしまう灰原

コナンは横目で睨んだ

コナン「おめえの正体を暴いてみたくなってるな？」

快斗「わりいけど、探偵は警察じゃねえ」

「容疑者を追い詰めることはできても捕まえることはできない…」

「そしてその警察ですら証拠もなにもないやつを捕まえるのは現行犯意外に不可能…」

「お前がここまでどうやって辿ってきたかは分からねえが俺は追い詰められる気も現行犯になる気もさらさらねえぜ？」

快斗は余裕の笑みでそう言った

コナン「んなこたあ、どうでもいい」

快斗「はっ？」

コナン「……」

灰原「何今更恥ずかしがってるのよ？」

快斗「恥ずかしい……？」

コナン「別に恥ずかしがってなんかいいえよ…… ただ……」

灰原「ただ？」

……

殺気

なんとなくコナンの表情や行動とタイミング、二人のやり取りからコナンがここへ来た理由にだいたいの予想がついた快斗それを勝手に解釈し解決したかのように晴れた顔でコナンに問い掛けた

快斗「それよりよく隣にいる女の子はおめえの友達か？」

「情けねえなあゝ今頃青春街道まっしぐらのはずなのによ？ 足し算のお勉強とはなゝ」

灰原「あら？ あなたも一緒にどう？」

快斗（…、！）

何も知らない快斗は妙に大人なコナンの隣にいる茶髪の女の子の発言、そして違和感を覚える程の気配、漂う雰囲気に一瞬戸惑い言葉を失った

快斗「お、おいおい！ コナン君の友達だからって初対面で目上の人にタメ口はダメだぞ？」

「まったく、母ちゃんに教わんなかったのか？」

コナン（…！）

この瞬間、なぜかコナンが一番緊張した

灰原を恐る恐る横目でみるコナン：

案の定灰原の目は完璧に快斗を睨んでいた

コナン（おいおい…）

灰原「あら？ それはあなたの方なんじゃない？」

快斗「えっ…？」

灰原「私は彼と同じ身の18歳…」

「そして私の両親は私が小さい頃に殺されそんなことを教える余裕もなく死んだわ」

快斗「……………」

「そ、そうなんだあ… それは気の毒に…」

コナン（ハハハ）

快斗「おめえいつもこのお方と一緒にいるのか…？」

コナン「ああ？ まあな」

快斗（俺なら無理だな…）

「す…すげえな？」

灰原「……………」

また快斗を睨む

快斗（俺は苦手だぜ…）

その時

ふとテレビの音が耳に入った

赤から青の漠然

コナン「ってか、俺が来たのは…」

『ました…場所はあの眠りの小五郎で有名な毛利小五郎の毛利探偵事務所…』

コナン（！）

灰原（！）

快斗（！）

三人はテレビに顔を向けた

『…現場は騒然としており毛利探偵は肩を撃たれて病院へ搬送されております。意識はあったため毛利探偵の話によれば犯人は娘の毛利蘭さんを誘拐しどこかへ消えてしまったようです…』

コナン「蘭…：！？」

コナンの顔は赤から青へとたちまちに染まった

コナンは目暮警部に電話をかけた

プルルルツ… プルルルツ…

目暮『はい、目暮』

コナン「目暮警部！？おっちゃんは！？」

目暮『おーコナン君か！毛利君は今米花中央総合病院で手術中だ、幸い急所が外れており90パーセントの確率で助かるそうじゃ』

コナン「そう…」

少しホツとする

コナン「目暮警部、何があったの！？」

目暮は小五郎から聞いたさきほどの出来事をコナンに話した
ただ小五郎は犯人の顔は見えていないと目暮に言っていたようだ…
いきなり覆面を被った男が蘭を拐って行こうとして止めたら撃たれた…

そうゆう風に話していた様だ

そう、蘭の条件にはまた男からの条件があったのだ
命を助けてやる代わりに小五郎に

『警察には顔を見ていないと言え、そうじゃなければ娘の命はない』
と、そう言われていたのだ

コナンは電話が終わり事を灰原と快斗にも話した
そしてコナンは何か気がかりな点を見つけた

違和感の追求・推理編・

灰原「何か浮かない顔してる様だけど？」

コナン「ああ…」

「何か違和感がある…」

灰原「何？」

コナン「良く分かんねえけど… まず、肩を撃たれたおっちゃんはどうやって救急車を呼んだか…」

「救急隊員の話によるとおっちゃん本人がかけてきた様子だったらしい…」

快斗「なら電話で呼んだんだろ？」

コナン「そうなるけど… 娘が拐われて行ったのにおっちゃんが蘭よりも自分を優先するだろうか…」

「そして電話できる力が残っているなら蘭を途中までも追いかけた筈だ…」

灰原「なるほど？ 誰かが毛利小五郎になりすまして救急車を呼んだ…そう言いたいよね？」

コナン「そして何故蘭はその犯人について行ったのか…」

快斗「拳銃か何かで脅されてそうするしかなかったんじゃないか？」

コナン「にしても妙だ… 犯人は一人だけだと言っていた」

「いくら拳銃を持っていたても蘭なら隙を見て退治することくらいできると思うが…」

すると灰原はコナンのコメカミに銃に見立て手でポーズをとる

灰原「こうして一瞬の時もズラすことなく構えていたとしたら？」

快斗「犯人が空手の上級者だと知っているとしたら？」

コナン「ああ…それほど失敗してはならない事情がある」

「蘭が空手の上級者だと知っている…つまり知り合いの可能性があるとしたら」

「蘭を脅しつれ拐うことも簡単、そして殺しが目的ではない犯人はたぶん蘭との条件でおっちゃんを助けた…」

「おっちゃんの性格の勉強不足で自分を明かしてしまうことも知らずにね…」

またもや不適な笑みを浮かべるコナン

違和感の追求・確信編・

コナン「あとは何を言い訳に蘭を拐ったかだ…」

「蘭やおっちゃんを狙いならその場で射殺しているだろうし、それなりの理由がねえと…」

快斗「その状況からすると間違いなく犯人の狙いはおめえだな？」

コナン「えっ？俺…？」

「確かに襲ったのは毛利探偵事務所だけ…」

灰原「工藤くんや毛利探偵なら解るけどなぜ江戸川くんなの？」

快斗「あの彼女が肩とはいえ撃たれた毛利探偵を置いて犯人の言いなりになってついて行くんだ…」

「毛利探偵を置き去りにしてまで守りたい者は工藤新一かおめえだろうな？」

灰原「つまり工藤新一か江戸川コナンを理由に彼女を脅し連れ拐ったのね？」

快斗「そうゆうことだ！」

コナン「理由はたぶん…俺への復讐か？」

灰原「その可能性が高いわね？」

「工藤くんはいくつもの事件を解決している… その男は以前練りに練った犯罪計画をあっけなく工藤くんに阻止された… そんなところかしら？」

コナン「ああ、でも江戸川コナンが解決した事件はかなりある…」

「それにこの計画は蘭がコナンを大切に思っているということが分かってねえと実行できねえ…」

快斗「コナンが解決した事件で、おめえのことを彼女が大切に思う素振りや発言をしたことがあるか？」

コナン「って言われても…」

(!!)

その時コナンはやっと思い出した

そう、今朝探偵事務所の前で見かけた不審な男のことを…

違和感の追求・revenge・

快斗「どうした？」

コナン「今朝、探偵事務所の前に不審な男がいた」

快斗「本当か!？」

灰原「その男の人相は!？」

コナン「それが、一瞬だったからな…」

「不審というのは分かったけど…」

「でもあの顔、どこかで見たような…」

快斗「思い出せ、名探偵!！」

コナンは頭を抱えて必死に思い出そうとする

灰原「そういえば、こないだの事件の容疑者、まだ逃亡中だったわよね？」

「まさかその男じゃ…」

コナン「!！」

思い出した

「そいつだ!！」

灰原「!？」

快斗「!？」

当然快斗もよく知っていた

コナン（あの目付き、間違いねえ!）

「三日前の事件は俺が犯人を海に落とした…」

「その前に別の事件の容疑者に俺は飛行船の窓から外にはおり出されてる… おめえのお陰で助かったがその時蘭は俺の名前を呼び叫んだ」

灰原「恐ろしいほど辻褄が合うわね…」

コナン「ああ…」

快斗「そいつは何が目的だ？ お前を誘き出そうとしているならとっくにお前への指示が来ているはずだ」

「それに探偵事務所の前にいたならなんで…」

コナン「真の狙いは俺じゃねえってことだよ」

灰原「…？」

追い詰めた未熟な真相

コナン「俺を誘き出すどころか俺を避けてる…」

「俺に知られたらきつと今回の作戦もあっけなく失敗してしまう…俺の外出時を狙うほど必ずしも成功させなくてはいけないことをしようとしている…」

灰原「何をしようとしてるの？」

コナン「いや、それはまだ…」

「こないだは奈良からセキュリティを排除し仏像を盗もうとしてたけど…」

「さすがに同じことはできないし今は寺の周囲には警官でいっぱいってテレビで…」

(!!!!)

コナンは何か嫌な予感がした

(ま…まさか!?)

するとコナンは携帯を取り出した

マナーモードになっていた携帯には何件もの着信があった
だが履歴を確認することなく

コナンはあの人に電話をかけた

プルルルッ プルルルッ ガチャッ…

『ドアホ!! 何べん呼べば出るんや!!』

電話に出ると同時にコナンにそう怒鳴る

コナン「わ、わりいな服部…」

服部「お前んとこどないなってんや!？」

さすがに西の高校生探偵も驚き戸惑っていた

そしてコナンは事件の概要と今までの確信的な推理を話し服部に頼み事をした

瀬戸際の挑戦

コナン「こないだの寺なんだけど…」

服部『ええで、任せとき!』

『とりあえずそこに居たらまた連絡するさかい』

コナン「ああ、わりいな… 俺もすぐ向かうから!」

そう言うときコナンは電話を切り奈良へ向かうとする

コナン「…ということだ」

「快斗、俺を奈良まで向かわせてくれ」

快斗「あん? どうやってだ?」

コナン「おめえ空飛べんだろ?」

灰原「…」

快斗「おめえ何言ってるんだ!? 俺は飛行機じゃねえぜ? だいたい奈良までなんかハングライダーで飛べるわけねえだろ!」

コナン「そうか… なら仕方ねえ」

と新幹線の時刻表を調べ始めた

灰原「なるほど、関西方面行きの飛行機はさっき出たばかり… 次の便までには時間があるのね…?」

コナン「ああ、新幹線もすぐに発車するのはねえが思いつく交通手段では最短で奈良につける筈だ!」

灰原「にしてもハングライダーで連れて行ってゆうボケ、彼らしくないわね…」

快斗「ある意味殺人だな…」

灰原「かなり追い込まれているようね…」

快斗「瀬戸際に立った時、無謀な事に挑戦する… こないだもハン

グライダーで飛行船内に連れていけとか言ってたな…」

と二人でボソボソ言いながら難題に立たされたコナンを見守る

企む悪事

それから二時間が経った

「奈良」

三日前に盗むのを失敗した仏像がある寺にはまだ警備の人間がたくさんいた

それを車に乗ったまま木の影からこっそりと覗く男

その後ろには蘭もいた

蘭「ここって…」

男「ああ、例の寺だ」

「復讐とリベンジに来たんだ」

蘭「リベンジ…?」

男「ああ、今日こそは手に入れようかと思ってね」

蘭「…まさかまた仏像を!?!」

蘭は男を睨んだ

男「ああそうだ、何だその目は?警備が多すぎるとでも言いたいのか?」

「大丈夫、俺が盗みに行く訳じゃないから」

蘭「……?」

男「君に行ってきてもらおう」

蘭「えっ…!?!」

驚き再び男を睨む

男「俺の本当の目的は復讐だ、仏像を手に入れて金にするのはおまけだ、儲けが出ればいいなくらいにしか思っていない」

蘭「どうゆうこと…?」

男「フフフツ…君がこんな警備が多すぎる所に仏像を盗みに行けば当然見つかって捕まる…」

「だが、真面目にやるんだぞ? 一体くらいは持ってきてくれよな? でなきゃあのガキや君の友達、皆殺しだ…」

「君が捕まればあのガキは悲しむだろうな? 犯罪に手を染めたこと、捕まったことに…」

「そして世間には大きく報じられあのガキの人生は真っ暗だ、ハハハッ!」

悪い顔をする男をじいつと見て睨み付ける

蘭「私、そんなことできません!」

キツパリと男に言い放った

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7300x/>

『天空の難破船（ロストシップ）』番外編

2011年10月21日11時00分発行